

多賀茂・三協康生編

『医療環境を変える』

—「制度を使った精神療法」の実践と思想—

(京都大学学術出版会・二〇〇八年八月)

山口直彦



本書のタイトルには、題目が二つ並んでいる。後者の方が、活字がやや小さくなっている。これが解説すれば、「制度を使った精神療法」を実践して、「医療環境を変えよう」との強い意図が表現されているのであろう。

「制度」とは何か、「制度を使う」とはどういうことか？ これは第二次世界大戦下のフランスでジャン・ウリ医師（一九二四年生、ラ・ポルト病院創立者であり、今なお現役）によって始められた活動がモデルである。身近ではあるが、あまりにも習慣的であるため、われわれには見えにくくなった制度によって、われわれは規制されている。意識されることなく出来上がっているルール、たとえば「患者」も制度によって規定されている。しかし臨床の場ではそれは見えない。医療改革のためには、習慣的になってしまっただけで見えなくなっていることを掘り起こし見

直す、つまり制度の分析が必要となる。

本書は、多くの人の分担執筆で構成されている。編者である多賀茂、三協康生の他に、ジャン・ウリをはじめ外国の研究者をふくむ一九名の執筆によって成り立っている。その職種は、精神科に限らない医師、人類学者、看護師、写真家、建築家、心理士、精神保健福祉士、ひきこもり問題研究家など、多士済々である。

しかし、「あとがき」によれば、本書のそもそもの発端は、編者の一人である多賀の文部省科研費によるプロジェクト「病院環境をめぐる思想・フランス精神医学の歴史と現状から見えるもの」（二〇〇三年）であった。共同編者の三協もそれに加わった。二〇〇五年、ジャン・ウリを日本に招聘し、各地でワークショップが開催された。二〇〇六年にプロジェクトは終了したが、その成果をさらに補充すべく、「制度を使った精神療法」を旗印に上記執筆者を集め、二年の時を経て、本書が完成した。

本書は、七つの章に分けられ、前半の一から四章までは「対話編」、五から七章までは「思想編」とされ、両編の間に「制度という論点」をめぐっての対話編が挟まれている。本書は四〇〇頁を越え、執筆者は二〇名を越え、重量は七〇〇グラムを越えて（持ち運びに重いので、体重計に乗っけてみた）、重裝備された戦車のごとくである。

本書には、少なくとも私にとっては聞き慣れない用語や概念がしばしば出現する。それが続く、読み続ける意欲が失せていく。しかしそれを察してか、本書は親切にも導きの糸を用意してくれている。key wordの欄である。私にとっては「制度／

制度分析」、「コレクティブ」、「トランスヴェルサリテ」、「抽象機械」などの解説（いずれも二―三頁を割いている）が本書を読み進めるうえで、導きの糸となった。

本書のもう一つの特徴は、全ての著者のかなり詳細なプロフィールが紹介されていることである。学歴とか職歴、業績のみならず、おそらくご自分が書かれたと思われる個人史がついている。著者の生き方が分かれれば、著者の論理や意見が分かりやすくなる。

さて、ここで、きわめて個人的な疑問について触れることを、お許しください。この次元の高い、多くの専門家が関わって完成した発行物の書評が、なぜ私に巡ってきたのか、という素朴な疑問である。私は拒否能力（と言うか、「とても私の能力では手に負えません。申し訳ないですが、ご辞退させていただきます」と言うこと）に欠けるところがあつて、結果として依頼者に迷惑をかけることが、よくあつた。

お引き受けしたかぎりは、評論しなければならぬのであるが、実は依頼を受けて、本書を手にするまで、ジャン・ウリ先生のお名前を存じ上げなかった。従つて、二〇〇五年にわが国を訪れ、講演し討論されたことも知らなかった。この本を手にして初めて、私が私淑する松本雅彦先生、本書発行の中心的役割をされた先生の何人かが、ラ・ポルテ病院において、活動に参加あるいは研修をされたことを知った。

さて、ここから、この本の内実に触れ、主張されていることを分かりやすく紹介する段である。しかし、本書は二〇名を超える著者の集合で成り立っており、とても紹介しきれるもので

はない。また、この本に限らないが、私の能力ではとても解説できないところもある。これは私の無知の為であり、著者の責任ではない。

そこで、私が読みながら取ったメモを見ながら、その深い意味は分からないが、何となく調子がよく、「なるほど」と感動した表現のごく一部を、わたしなりに紹介したい。

* 「制度」とは何か？

病院や地域で、意識はされていないが、無意識のうちに出来上がった非公式のルール、場の雰囲気、など

* 「制度を使った精神療法」とは何か？

「治療関係者を直していこうということ」である。医師、看護師、その他の医療関係者、患者周辺の人たち、それぞれが自己を変え、周囲を変えていくこと、さらに治療に関係のある制度にも関与していくこと。当然、力動的にこの関係は徐々に変わっていくが、それに対応した変化をそれぞれがしていくこと

* 精神科における電子カルテの是非

精神科の医療は、共時的体験の中でこそ相互の信頼が生まれるのに、電子カルテは？

* 根を枯らさないために

自由競争の原理は、人に余力を残させないことである

*再び「制度」とは
制度とは、暗黙の了解である
制度とは、自然の反対である

以上

この本を購入され、じっくり時間をかけて精密な解読をされることを、お勧めします。

(やまぐちなおひこ・精神医学)